

愛知・清洲城下町遺跡(1)

1 所在地 愛知県西春日井郡清洲町

2 調査期間 一九八六年(昭61)四月～一九八七年三月

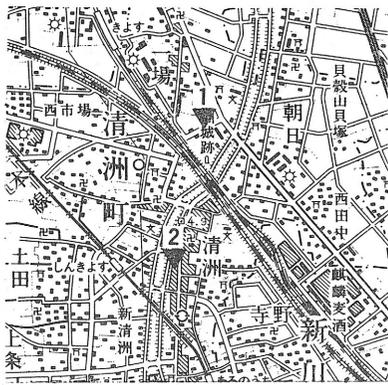
3 発掘機関 愛知県埋蔵文化財センター

4 調査担当者 小澤一弘・細野正俊・水谷朋和・中野良法・梅本博志

5 遺跡の種類 城郭・都市跡

6 遺跡の年代 平安時代～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(名古屋北部)

清洲は、織田信長の居城地として知られているが、中世においても、尾張の守護所が置かれたこの地方の中心都市であり、また、信長以後も、豊臣、徳川政権下の有力大名が次々と入城し、慶長一五年(一六二〇)の名古屋築城に至るまでは全国屈指の城下町を形成していた。この清洲城とその城下町

の調査は、昭和五六年から継続的に実施されているが、遺跡全体が五条川流域の低湿地帯に位置することから、木製品の出土も多く、墨書を有するものも現在までに二〇〇点近くが発見されている。

昭和六一年度は、五カ所の調査区で、合わせて約八〇〇〇㎡の発掘調査を実施したが、このうち、二地点において、木筒類の出土があった。

一 神明町地区（IKJS161B）

名古屋環状二号線建設に伴う事前調査として実施。調査地点は、『清須村古城絵図』によれば、「中堀」と「内堀」を結ぶ南北方向の大溝の位置にあたり、発掘の結果でも、幅四五m、深さ二m余りの「堀」の存在を確認することができた。

板塔婆の出土した溝SD一七は、天正一四年（一五八六）頃と考えられるこの「堀」開鑿時の整地により埋没している。

二 本町地区（IKJH161D）

五条川河川改修に伴う事前調査として実施。この地区は、「外堀」と「中堀」の間にあたり、城下町期では町屋を中心とした地区であり、また、「清須越」以降においては、美濃街道の宿場としての町並みが形成されていた部分である。このうち、今回の調査地点は、宿場の発展に伴い近接する甚目寺村より移転したとされる「久証寺」の旧境内地にあっている。

柿経の出土した土壙SK〇五は、東西七・二m、南北一八m程の

ほぼ長方形の池状の遺構であり、この埋土下層からは、柿経の他に「志野」「織部」をはじめとする多量の陶磁器類、あるいは、箸、漆碗などの木製品が一括出土している。埋土上層は、厚い整地層となっているが、これは、寛永元年（一六二四）のこととされる「久証寺」建立に伴うものである可能性が高い。

8 木筒の積文・内容

一 神明町地区（IKJS161B）

溝SD一七

- (1) ×無妙法蓮華經^{〔為カ〕} □聡寿幽儀罪障 □×……
□不復受 七月×(496+23)×(63)×3 061

板塔婆の断片であり、文言、書体から法華宗系と考えられる。清洲城下町遺跡では、断片を含め、現在までに二八点の板塔婆の出土例があるが、法華宗系と考えられるのは、この一点のみである。枳目材を用い、焼損のため頭部の形状は不明であるが、下端は串状となる。

二 本町地区（IKJH161D）

土壙SK〇五

- (1) □^{〔波カ〕}羅密多無

091

般若心経を書写した柿経の断片。清洲城下町遺跡では、現在まで



清洲城下町の「堀」の復元と木簡の出土地点

●昭和60年度以前 ▼昭和61年度

9 関係文献

に、二地点から二四点ほど柿経の出土例があるが、原典が確認されたものは、いずれも法華経であり、それ以外の経典を書写したものは、本例が初めてである。

なお、木簡の積読にあたっては、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部加藤優氏の御指導を得た。記して感謝したい。

（財）愛知県埋蔵文化財センター『年報 昭和六一年度』（一九八七年）

（梅本博志）